「東海道」の成り立ち

天正18年（1590）に江戸に入城した徳川家康は、慶長6年（1601）東海道、中山道、日光街道、甲州街道、奥州街道の5つの街道と宿駅を制定。慶長9年（1604）には、街道の幅員を5間とし、1里を36町と決めて路傍には榎などを植えた一里塚を築かせた。また、街道の両側には道幅を特定するために並木を植え、それにより旅人のための木陰を提供した。

東海道の箱根湯本からの道筋は、鎌倉時代から使われた中世東海道の尾根筋から谷筋へと経路が変更された。元箱根から箱根宿までは中世の経路とほぼ同じで、箱根宿から三島宿までは中世の箱根越えの道の東南側に並行して新しく道が作られた。

箱根路、箱根旧街道とも呼ばれる東海道「箱根八里」は、険しい箱根山を江戸防衛の要として、三島側の西坂は関東に侵入する敵を発見しやすい尾根道、小田原側の東坂は外敵を迎撃しやすい谷筋に経路がとられたといわれている。

小田原市 神奈川県

小田原城跡 国史跡

小田原宿

小田原が城下町として発展したのは15世紀末の北条氏の進出後で、城は拡張され、その守りの固さで上杉謙信や武田信玄をも退けた。天正18年（1590）豊臣秀吉の小田原攻めにより北条氏は小田原城を明け渡す。領地は徳川家康に与えられ、その後西への防衛の要として大久保氏や稲葉氏などの譜代大名が小田原城に入った。

小田原宿は慶長6年（1601）に成立。江戸を発ってから9番目の宿場で、起点の日本橋からの距離は約80km。手前の大磯宿からは16kmあり、その間に間の宿の梅沢や酒匂川があった。

幕府は江戸防衛のため東海道の主要河川に橋を架けなかったが、酒匂川も延宝２年（1674）に徒歩（かち）渡しとなり旅人は川越人足の肩や輦台で川を渡った。小田原宿から次の箱根宿までは16kmあまりあり、険しい箱根越えを控え、ほとんどの旅人は小田原に泊まった。

小田原宿には本陣と脇本陣が4軒ずつあって東海道で最多。旅籠の数は江戸時代後期で95軒あり、東海道最大級の宿場町であった。

○お問合せ
小田原市 経済部観光課
〒250-8555 神奈川県小田原市荻窪300番地
TEL.0465-33-1521　FAX.0465-33-1286

箱根町 神奈川県

箱根関跡 国史跡

箱 根 宿

小田原宿と三島宿の間に箱根宿が設けられたのは元和4年（1618）。徳川家康により宿駅伝馬制度が作られてから17年後である。箱根越えの道の険しさに難儀した参勤交代の大名たちからの要請によるものともいわれている。

当初、幕府は元箱根への宿場の設置を検討したが、箱根権現の門前町であったことから新たに芦ノ湖畔を開拓。小田原宿と三島宿からそれぞれ50軒を移住させた。旧箱根宿の中心部には、今も小田原町、三島町の名前が残る。

その後、江戸から10番目の宿場として規模を拡大。江戸時代後期には、問屋場2軒、本陣6軒、脇本陣1軒、旅籠の数は36軒あったとされる。

箱根は温泉場としても知られており、奈良時代の発見とされる湯本など歴史ある温泉場が複数ある。三枚橋で東海道と分岐する七湯道の沿線には、湯本、塔之沢、堂ヶ島、宮ノ下、底倉、木賀、芦之湯があり、江戸時代の初め頃から箱根七湯として親しまれた。

江戸から気軽に訪ねることのできる箱根は行楽地として庶民の人気を呼び、浮世絵などにも多数描かれた。

○お問合せ
箱根町 企画観光部観光課
〒250-0398 神奈川県足柄下郡箱根町
湯本256番地
TEL.0460-85-7410　FAX.0460-85-6815

三島市 静岡県

三嶋大社 国重文

三 島 宿

三島は伊豆国の一宮である三嶋大社の門前町として古くから栄えた。

江戸日本橋から数えて11番目の宿場町であり、三嶋大社門前で東海道と下田街道、甲州道が交差する交通の要所であった。江戸時代初期には、幕府の直轄地として伊豆国を管轄する代官所が置かれていた。

当時、伝馬、久保、小中島、大中島の4町あたりが宿場の中心地となっており、この4町が中心となって三島宿を運営していた。本陣には、一の本陣と呼ばれた世古本陣と二の本陣・樋口本陣の2軒があり、脇本陣は3軒で旅籠の数は74軒あった。箱根越えを控えた西からの旅人は三嶋大社に祈願をし、無事に箱根越えを終えた東からの旅人は三島宿で山祝いをしたと伝えられている。

○お問合せ
三島市 産業文化部商工観光課
〒411-8666 静岡県三島市北田町4番47号
TEL.055-983-2656　FAX.055-983-2754

函南町 静岡県

山中城跡 岱崎出丸跡（だいさきでまるあと） 国史跡

甲石坂（かぶといしざか） 国史跡

山中一里塚

かんなみ仏の里美術館

函南町の町名の由来は、箱根（別名:函嶺）の南に位置することからとされる。標高1000mクラスの山があり、箱根山、鞍掛山、玄岳に囲まれて豊かな自然環境を有している。

日本遺産「箱根八里」に関連する史跡のほか、箱根権現（箱根神社）の開基とされる万巻上人（まんがんしょうにん）ゆかりの地など、多くの歴史資源が残る。

桑原地区では、平安時代の「薬師如来像」や鎌倉時代の「阿弥陀三尊像」など、国指定重要文化財を含む24体の仏像群が里人の厚い信仰心により守られてきており、それら貴重な文化財を後世に保存継承するために「かんなみ仏の里美術館」が設置されている。

○お問合せ
函南町 建設経済部産業振興課
〒419-0192 静岡県田方郡函南町
平井717番地の13
TEL.055-979-8173　FAX.055-978-3027

編 集 箱根八里街道観光推進協議会
https://www.hakone-hachiri.jp/
〒411-8666 静岡県三島市北田町4番47号（三島市産業文化部商工観光課内）
TEL.055-983-2656　FAX.055-983-2754
発 行 三島市教育委員会文化財課　TEL.055-983-2672
令和３年２月10日

JAPAN HERITAGE
日本遺産

箱根八里街道観光推進協議会

神奈川県小田原市、箱根町、静岡県三島市、函南町

日本遺産

八箱里根

～ストーリーと構成文化財～

『日本遺産』とは

『日本遺産（Japan Heritage）』は、地域の歴史的魅力や独自の文化を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が『日本遺産』として認定するものです。

ストーリーを語る上で欠かせない魅力あふれる有形・無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

神奈川県小田原市・箱根町、静岡県函南町・三島市を結ぶ旧東海道「箱根八里」は、江戸時代の街道旅を追体験するストーリーにより、2018年5月に『日本遺産』に認定されました。

「箱根八里」には、『日本遺産』を構成する多くの文化財があり、往時の旅を彷彿とさせる城下町や宿場町、一里塚、石畳、並木、関所、茶屋のすべてが日本で唯一現存しています。

「箱根八里」について

箱根旧街道「箱根八里」は、江戸時代初めに徳川幕府が整備した東海道の一部です。標高約10mの小田原宿から標高846mの箱根峠を登り、標高約25mの三島宿まで下る8里（約32km）の道です。

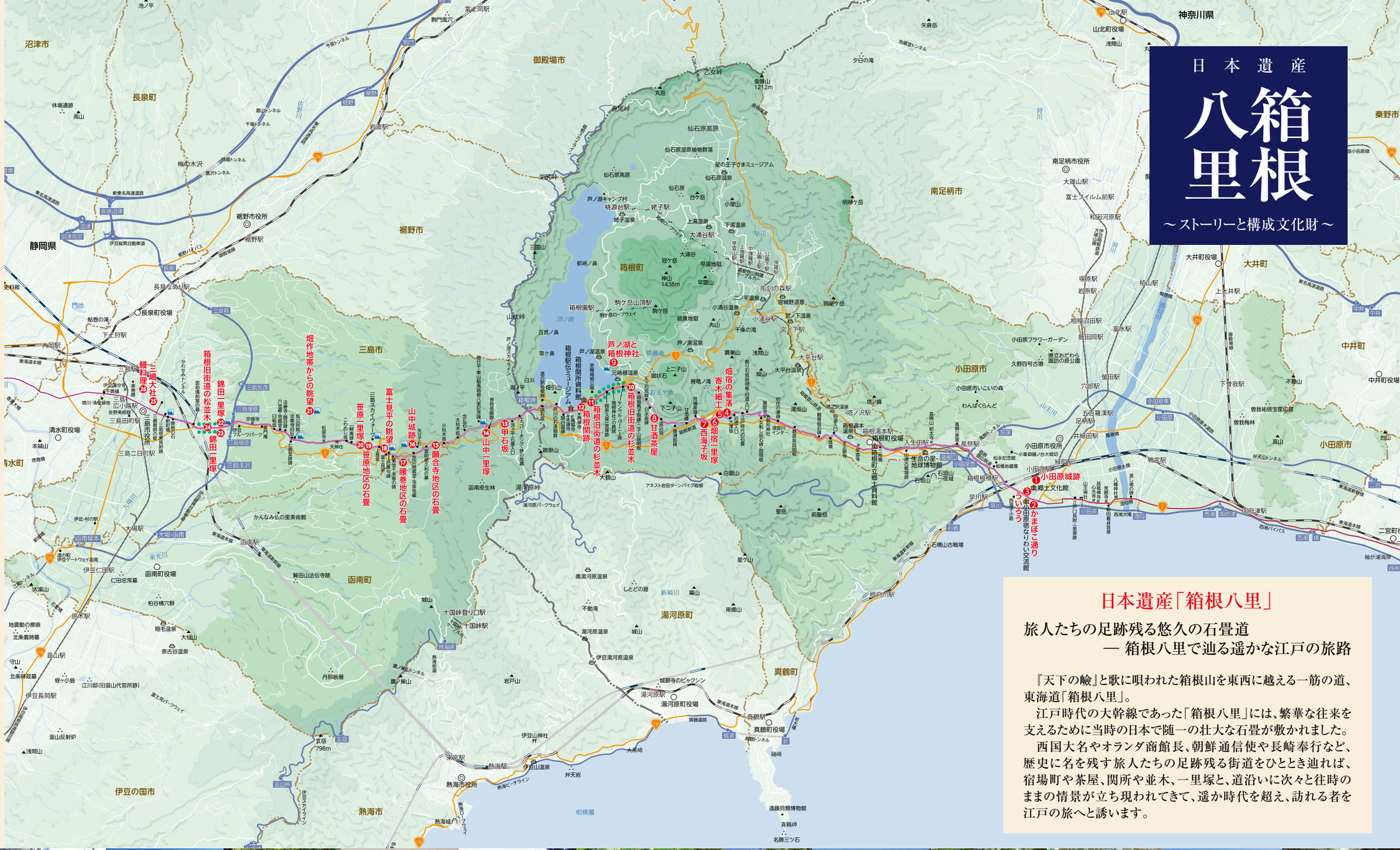
この道は、「天下の嶮」と歌に唄われたように、東海道第一の難所とされていました。「箱根八里」のうち、小田原宿から箱根関所を通って箱根峠までを東坂と呼び、箱根峠から三島宿までを西坂と呼んでいました。

箱根山は小田原の酒匂川（さかわがわ）と並び、外様大名の大藩のある西国から江戸を守るための最重要地でした。かつてこの険しい坂道をオランダ商館長の江戸参府に同行したシーボルト、将軍家への拝賀のために江戸に向かう朝鮮通信使の行列、長崎へ赴任する長崎奉行の一行、伊勢詣でや金毘羅参りの人々など、さまざまな旅人たちが行き交いました。

当初、箱根旧街道は雨や雪の時など脛までつかるぬかるみとなるために竹が敷かれていましたが、延宝8年（1680）に2間幅（約3.6m）で石が敷き詰められて以降、石敷きの道となりました。

「箱根八里」に現存する一里塚のうち、錦田一里塚は大正11年に国史跡に指定されました。

平成16年には、西坂・東坂の計約5kmが国史跡に指定されました。



日本遺産「箱根八里」

旅人たちの足跡残る悠久の石畳道 ― 箱根八里で辿る遥かな江戸の旅路

『天下の嶮』と歌に唄われた箱根山を東西に越える一筋の道、東海道「箱根八里」。

江戸時代の大幹線であった「箱根八里」には、繁華な往来を支えるために当時の日本で随一の壮大な石畳が敷かれました。

西国大名やオランダ商館長、朝鮮通信使や長崎奉行など、歴史に名を残す旅人たちの足跡残る街道をひととき辿れば、宿場町や茶屋、関所や並木、一里塚と、道沿いに次々と往時のままの情景が立ち現われてきて、遥か時代を超え、訪れる者を江戸の旅へと誘います。

日本遺産

八箱里根

はこねはちり

～旅人たちの足跡残る悠久の石畳道～

構成文化財

小田原は北条氏が開いた城下町で、江戸時代には東海道最大規模の宿場町であった。大久保氏や稲葉氏が治め、小田原藩藩庁が置かれた。総石垣や白壁、復興天守、城門など城下町時代の名残を伝える。

かつて網元などの漁業従事者が、相模湾で揚がる鮮魚を蒲鉾に加工。箱根方面の温泉宿で販路を拓き、小田原の名物に育てあげた。かまぼこ通りと呼ばれる通りには歴史的な木造建築物の老舗群が残る。

戦国時代から続く薬商。北条早雲に招かれ小田原に移住し、宿老をつとめた。家伝薬とともに菓子「ういろう」も販売し東海道の旅人に広く知られた。併設の博物館には伝来の史料が展示されている。

江戸時代に宿場間に置かれた間の村のひとつ。箱根越えの旅人の休憩のための茶屋があった。畑宿茗荷屋で休息した大名やオランダ商館長一行が「江戸参府紀行」などの記録に残している。

江戸時代後期に畑宿の石川仁兵衛によって寄木細工の技術が確立されたと伝えられている。様々な種類の木を組み合わせて模様を作る寄木の木工品は、箱根越えの旅人の土産物として広く知られた。

日本橋から23里目の一里塚。直径約9mの円形に石積を築き小石を積み上げ土を盛り復元。塚の上には標識樹となる榧と槻が植えられた。箱根町には湯本茶屋、畑宿、箱根の3ヶ所に一里塚があった。

江戸側からは登り二町余りの坂道。踏み間違えると千尋の谷に落ちるといわれた急坂。

江戸時代から続く街道沿いの茶店。かつて付近には峠越えの旅人のための掛茶屋が複数あった。囲炉裏のきられた茅葺の茶屋では、名物の甘酒や力餅が味わえる。

富士山を背景に箱根の山々に囲まれ豊かな水をたたえる芦ノ湖は、江戸の旅人が憧れた景勝地。ほとりにある箱根神社は、奈良時代に創建され、鎌倉時代以降源頼朝や徳川家康など武家の崇敬を集めた。

東海道に唯一残る杉並木で、杉の巨木が街道の両脇に連なっている。並木は道幅を特定し、旅人を陽射しや風雪から守るため1604年に植えられた。当初は松だったが、その後杉に植え替えられたと考えられる。

江戸時代、旅人の往来を監視するために置かれた。幕府は箱根山を江戸防衛のために重視。関所は小田原藩により管理運営され、特に出女に対して厳重な取り調べが行われた。江川文庫から発見された史料をもとに復元公開されている。

坂道の途中に、かつて豊臣秀吉ゆかりとされる兜石があったことから甲石坂と呼ばれた。箱根竹に覆われた坂道は往時の風情を伝えている。

旧街道の南側に1基残る一里塚。江戸時代の記録では塚の上に樹木はないと記されている。

江戸時代の西坂の絵図には6ヶ所の石橋が描かれている。願合寺地区に2ヶ所ある石橋のひとつ「一本杉の石橋」が往時のままの姿で保存されている。

永禄年間（1560年代）小田原防衛のため北条氏が築いた山城。天正18年（1590年）豊臣秀吉の小田原攻めにより落城。北条流築城術の粋を集めた障子堀や畝堀が残る。富士山や駿河湾を望める。

腰巻地区の石畳の下からは山中城の堀の跡が出土。山中城の岱崎出丸（だいさきでまる）の堀を一部埋め立てて街道を造ったとされる。

江戸時代、東海道を通行する旅人に広く知られた富士山の眺望地。多くの旅日記や絵画などに記録された。付近には、箱根越えの時に詠んだとされる松尾芭蕉の句碑がある。

笹原新田は、東海道の整備にともない開かれた5つの新田集落のひとつ。このあたりまで峠道をたどると視界が開け、富士山や駿河湾が一望できる。

旧街道の石畳を少し上った南側の高台に1基残る一里塚。現在、塚の上には椎などの木があるが、江戸時代の記録では松が植えられたと記されている。

旧街道沿いの新田集落の人々は、明治になり旅人の通行量が減ると、箱根山西麓の山肌を開墾。耕作地を広げ畑作に生活の糧を求めた。富士山を背景にした大根干しは三島の初冬の風物詩となっている。

旧街道の両側に往時のまま一対2基残る一里塚は、錦田一里塚を含めて東海道では7ヶ所のみ。塚には現在榎があるが、江戸時代の記録によると、南側は榎、北側は松が植えられていたとされる。

三島宿方面に西坂を下り、三嶋大社へと続く旧街道沿いに残る松並木。約1km続く松並木は現在の東海道では最長。付近には、源頼朝に因む初音ヶ原の地名が残り、富士山の眺望地でもある。

伊豆国一宮として、源頼朝をはじめ武家の崇敬を集めた。本殿・幣殿・拝殿が国の重要文化財、境内にあるキンモクセイの古木は国の天然記念物。宝物館には、国重文指定の収蔵品が展示されている。

三島の住人は鰻を三嶋大社の神の使いとして古くから保護。幕末に東海道を通行した薩摩の兵が鰻を食したが神罰を受けなかったため食べるようになったという。富士山由来の水と職人の技により名物として知られる。